

研究課題	情緒応答性尺度日本語版の開発と低出生体重児の母子関係評価への応用に関する研究
研究代表者	森岡 由起子 (心理社会学部 臨床心理学科 教授)

(1). 研究目的

乳幼児の母子関係を客観的に評価する方法は数多いが、実験室だけでなく、家庭や保育園など日常的な場面で記録されたビデオを解析することで、母子の関係性を評価できる方法として、**Emotional Availability Scale** (情緒的応答性評価尺度:以下 **EA Scake**)がある。コロラド大学の **R.Emde** らとともに、この尺度の第4版を開発したのがコロラド州立大学の **Z.Biringen** 教授である。

本研究は、**Biringen** 教授を大正大学に招聘し、すでに翻訳が終了している日本語版を用いた情緒的応答性評価尺度の研修会を開催した後に、その尺度を用いて、日本の極低出生体重児などの臨床例の母子関係評価への応用を行うことであった。

- ① 情緒的応答性尺度第4版(著作権は **Biringen** が所有)日本語版テキストの作成
- ② 大正大学にて3日間(参加費 10 万円)の研修を実施し、情緒的応答性尺度の認定者を20人養成する(現在日本の認定者はまだ4人程度)
- ③ 日本語版の情緒的応答性尺度評価が、乳幼児と保護者・養育者などとの関係性評価として有用であることを、国内の研究者とともに検討する研究会を開催する。

*しかしながら、②については昨年2月に森岡・大西らがボウルダーの **Biringen** 教授宅を訪れ、直接の交渉と打ち合わせを行い本年9月に研修会実施を遂行する予定であったが、**Biringen** 教授側の事情で、実施することが困難となってしまった。7月時点で、国内からはこの領域の研究者・大学院博士課程後期生を含め研修会にはすでに15名以上の参加希望があったため、新たに国内の研究者を参集し、大学院生までを対象とした研究会を3月に実施することに内容を変更した。

(2). 研究方法

平成29年度の申請時研究方法は、以下のように訂正再申請された。

- ①情緒的応答尺度の日本語版はすでに2016年に山下が完成(2014)しているが、その校正を行い、**Biringen** の許可を得て、英語版と日本語版を見開きで比較しながら参照できる研修用のマニュアルを作成し、**Biringen** の監修のもとでボルダーにて印刷する。
- ②国内で情緒的応答性の評価や愛着研究評価の研究者・臨床家を中心とした研究会を開催し、情報交換を行うとともに、この領域の研究テーマを継続している大学院博士課程後期生を含め討論する。

研究会の講師は、山下 洋 (九州大学大学病院こころの診療部)

近藤清美 (帝京大学教授:成人の愛着評価 **AAI** の国際評価有資格者)

長屋佐和子 (**R.Emde** が開発した情緒的応答性評価法である **I Feel Pictures** : **IFP** 研究の日本での第一人者)

生地 新 (北里大学医療系大学院教授:情緒的応答性評価の有資格者) の4

名。

③文化的比較研究のため、日本の母子相互作用のビデオ記録(極低出生体重児の母子、発達障害児と母子など)の撮影を実施し、共同研究者での検討を行う。

母子相互作用における極低出生体重児と対象児研究については、大正大学倫理委員会と山形県立中央病院の倫理委員会の承認を得ている。

(3) 研究の成果と公表

近年、発達心理学、臨床心理学の領域で、母親と乳幼児の情動への関心が高まっている。これまで情動表出に関する母子研究の多くは、情動表出に伴う行動レベルに焦点をあてたものが多く、母親の情動認知と児との相互作用に注目した研究は少なかった。

「情緒的応答性(Emotional Availability)」は、初代乳幼児精神保健学会会長であったコロラド大学の児童精神科医 R. Emde 教授が提唱した概念(1988)で、乳幼児が非言語的コミュニケーションによって伝えてくる情緒信号を適切に読み取って、適切に応答する母親の心的機能を定義したものである。情緒応答性が障害されると、発達早期の母子関係や乳幼児の心理・身体状態に様々な問題が生じてくるとされ、特に乳児期において脳の発達にも大きな影響があることが実証されるようになった。

母親が乳幼児の情動をどのように読み取るかを把握するツールとしては、R.Emde らが開発した、I Feel Pictures (Infant Facial Expression of Emotions from Looking at Pictures : 以下 IFP)があり、小此木らによりその日本版も開発され(1990)、われわれもこれまで産後うつなどの臨床領域で使用してきた。しかしこの評価法は、12 ヶ月の子どもの顔写真 30 枚から情動を読み取る力を評価するもので、母親自身の情動投影が強くなされ、情緒的応答性の能力が評価されるが、母子の相互作用を評価することができなかった。そこで母子相互の情動を媒介とした関係性が日常場面でダイナミックに展開する様子を直接観察して評価する方法として、Emotional Availability Scales (情緒応答性評価尺度)が開発されている。現行の第4版は、R.Emde の弟子の一人である Zeynep Biringen 教授(コロラド州立大学)が開発している。これまで、この方法の訓練は、北米とヨーロッパが中心で、実施マニュアルの原版は英語で記述されている。

申請者はこれまで、母親の情緒的応答性を評価する日本版 IFP を大学院生とともに国内外の学会で発表、論文化してきた。情緒的応答性に関しては、母子関係を直接評価するツールの必要を感じていたところ、Biringen と EAScale を R.Emde から紹介された。2008 年に発表された EAScale は 2010 年にはすでに世界 57 カ国で使用されていた。しかし、日本では、言語の壁もあり、充分には普及していない現状にある。

研究目的①については、現在テキスト完成に向けて、山下・生地と Biringen で作業が継続されている。蛇足であるが、現在生地は R.Emde の「情緒的応答性」の翻訳作業中であり、Emde が来日する 9 月に刊行予定となっている。

変更された研究②の研究会は、平成 30 年 3 月 11 日(日曜)に大正大学 5 号館で、予定された 4

名の演者と約 20 名(医師 6 名、大学教員・臨床心理士 8 名、大学院生 6 名)の参加者で実施された。

・山下は、九州大学病院 NICU の実践と母子のボンディング障害評価について発表し、同僚の臨床心理士である岩山が退院後の地域による多職種の母子支援について紹介した。

・近藤は、こどもを養育する母親の愛着のアセスメントの実際について報告し、支援・介入においてのアセスメントの必要性と重要性について報告した。

・長屋は IFP 研究のこれまでの成果について報告し、森岡が本大学院生で助産師でもある岩田の助産院で出産した母親への IFP 評価と支援の実践研究について紹介、本島優子(山形大学地域教育学部：情緒的応答性尺度評価の有資格者)は、自身の最近の研究について紙上発表した。

・最後に生地は、R.Emde と Biringen のこれまでの研究の概説を行い、Biringen からのわれわれに対するメッセージを紹介した。また発達障害児の母子についての評価研究についての現況を報告した。

それぞれの発表後質疑応答が行われ、最後に全体討論が実施された。参加者全員が発言し、情報の共有と確認がなされ、今後の課題も明らかとなった。なお数名は、Biringen のディスタント・トレーニングによる資格取得を目指すことを希望されたため、Biringen への紹介を行った。

研究目的③については、森岡が山形県立中央病院で VIDEO による母子関係性評価のための撮影を開始し、現在は生後 3 ヶ月～3 歳までの極低出生体重児と問題なく出産した児各 10 名の撮影が終了している。今後は、情緒的応答性尺度の有資格者である生地・本島とともに研究をすすめてゆく予定でいる。

近年の日本では、児童虐待の問題や自閉症スペクトラム症などの発達障害への支援が注目されているが、母子関係の客観的な評価方法がなく、科学的な評価に基づいた母子への支援計画を立てることがむずかしかった。情緒応答尺度の普及に伴い、そのような客観的評価方法が日本にも根付く契機となる可能性もある。この評価方法が確立すれば、乳児院や養護施設などにおける養育者の支援にも有用と考えられ、汎用性の高い評価法といえる。

成果の公表については、世界乳幼児精神保健学会、児童青年精神医学会、小児精神神経学会などを予定していて、各学会誌への投稿も予定している。また、平成 29 年度は「極低出生体重児のアセスメントと支援について」は明治安田生命社会事業団助成金を獲得し、さらに平成 30 年度の文科省研究助成金を得ることとなった。研究をまとめるにあたって、援助頂いた学内学術助成に感謝いたします。また、研究の内容変更についてお認めいただいた大塚伸夫学長はじめ、多くのご配慮をいただいた研究推進課に深謝いたします。

参考文献

岩田裕美、森岡由起子：妊婦及び母親のメンタルヘルスと情緒的応答性 ー日本版 I Feel Pictures (JIFP) による早期母子関係性支援のための基礎的研究ー、母性衛生 57(1):123-130,2016

Morioka Y, Oiji A, Shibata K, Watanabe M, Aeba S: How perinatal factors and psychosocial factors in the obstetric ward affect the intelligence and behavioral problems at the age of three years among the very low birth weight children?

Proceedings for 14th World Congress of World Association for Infant Mental Health, 2014

Iwata H, Morioka Y, Oiji A: How maternal style of emotional cognition and depressive tendency affect mother-infant interactions?

Proceedings for 14th World Congress of World Association for Infant Mental Health, 2014.

岩田裕美、森岡由起子、長屋佐和子：妊娠後期と産後三ヶ月児の母親の情緒認知特性と母子相互作用についての検討：乳幼児表情写真(日本版 I Feel Pictures)と行動観察を用いて。乳幼児医学・心理学研究, 22(1)

: 43-57, 2013.

Oiji A, Morioka Y, Sawa T, Inoue K, Nagata Y, Sato M et al.:

Game of disappearing-reappearing and hide-and-seek in psychodynamic play therapy with maltreated children. Proceedings for 20th International Congress of International Association for Child Adolescent Psychiatry and Allied Discipline.